

はざま E かま
巡間 E 窯跡

所在地 瀬戸市巡間町地内
 調査理由 東海環状自動車道建設
 調査期間 平成 13 年 4 月～6 月
 調査面積 1,400 m²
 担当者 服部信博・川添和暁・織部匡久



調査地点 (1/2.5 万「猿投山」)

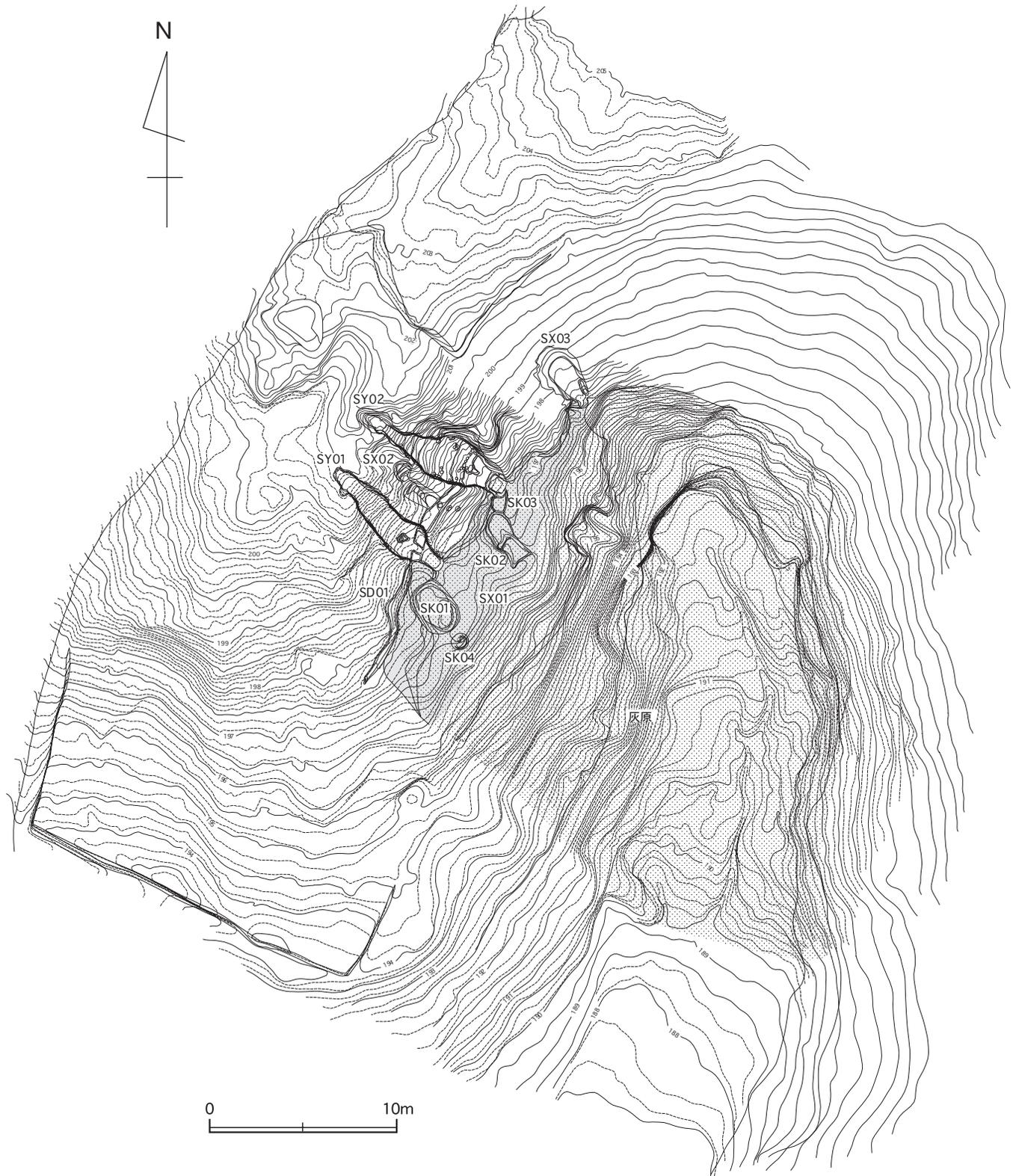
調査の経過 本遺跡の発掘調査は東海環状自動車道建設の事前調査として国土交通省愛知国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。調査面積は 1,400 m² で平成 13 年 4 月から 6 月にかけて実施した。

立地と環境 巡間 E 窯跡は瀬戸市の南東部巡間町地内に所在する室町時代初頭の窯業遺跡である。本遺跡は矢田川上流の赤津川流域に広がる赤津盆地を囲む丘陵の一角に位置している。巡間 E 窯跡は標高 200m から 210m を尾根とする馬蹄形をした丘陵の内側南東斜面に立地している。窯体は尾根直下に 2 基確認され、その軸線は真北から約 60 度西へ振っており、標高は 198m から 201m ほどである。灰原は窯直下から谷底部の標高約 190m ほどのところまで全体的に広がっている。丘陵の南端には東から西へ流れる惣作川に沿って里道が存在し、里道を挟んだ遺跡の対岸には自動車道の瀬戸東 IC の工事が進んでいる。周辺の主な遺跡としては上述の里道を西に進んだ式内社の大目神社には境内に古墳時代後期の円墳がある。北約 300m に近世の窯跡として著名な瓶子窯跡がある。また北東約 600m のところに縄文時代の八王子遺跡が、さらに西へ約 1km には縄文時代から中世の複合遺跡である惣作鐘場遺跡などがある。

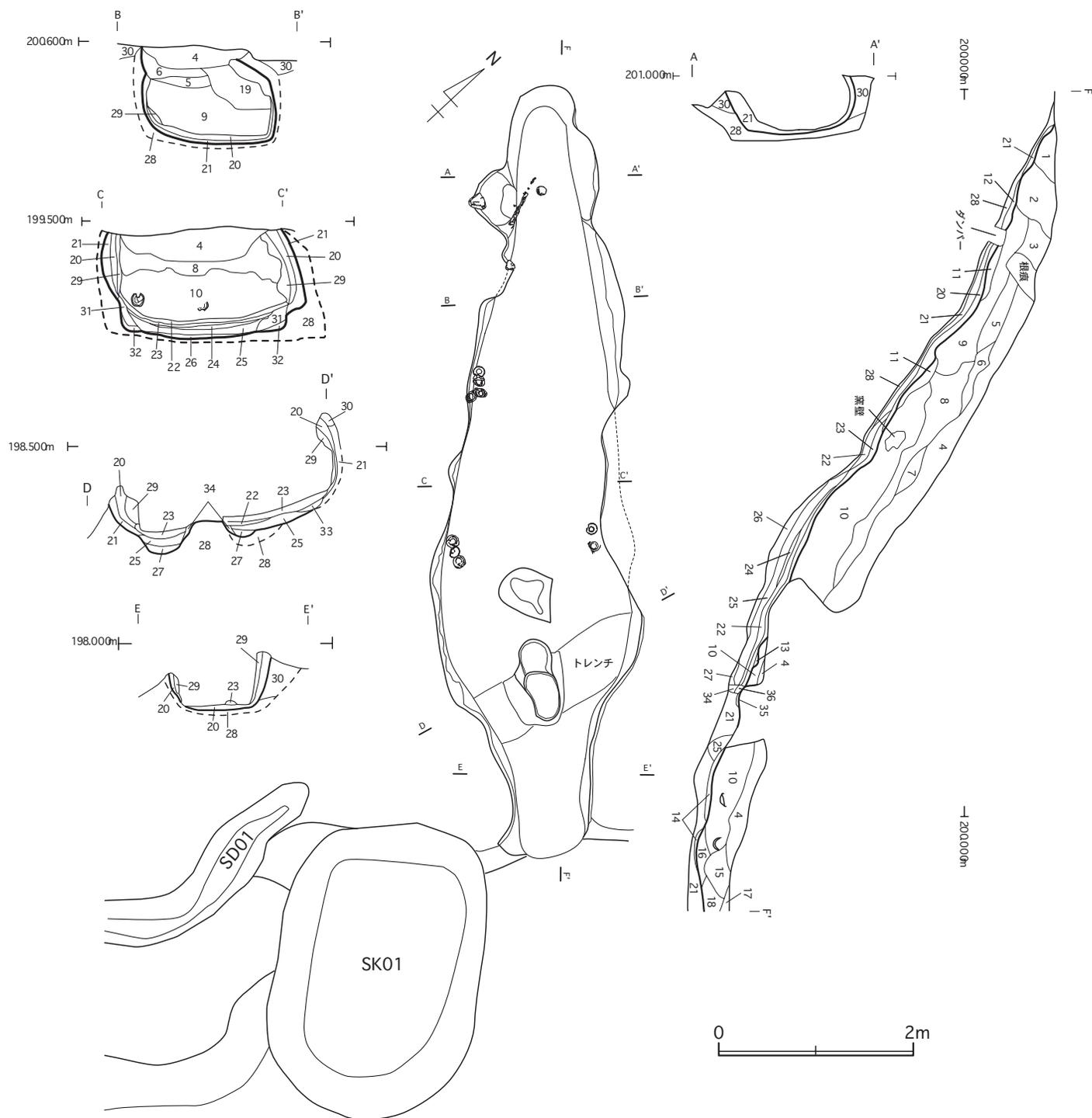
調査の概要 今回の調査で検出された遺構は、窯体 2 基・作業施設 1 基・溝 1 条・整地面に作られたロクロピット 1 基・灰原である。

遺 構 窯体 SY01 は、煙道部から前庭部にかけて検出できた。天井部分はずでに崩落しており、窯壁から床までの、地山である風化花崗岩を削り貫いて作られた部分のみ残存していた。残存長約 7.9m・最大幅約 2.2m・最大傾斜 32 度を測る。壁および床で修復の痕跡が最低 1 回は観察できた。出土遺物などから山茶碗を主に生産していたものと考えられる。煙道部からダンパーにかけての残存は良好で、ダンパーで深さ 50 cm を測った。ダンパーに使用されたと考えられる炭化材も出土している。焼成室の床表面に見られる硬化面はずでに消失しており、青灰色の粘質土が露出していた。分焰柱は残存高約 40 cm で、焼成室側から燃焼室側にかけて一度補修が行われていた。

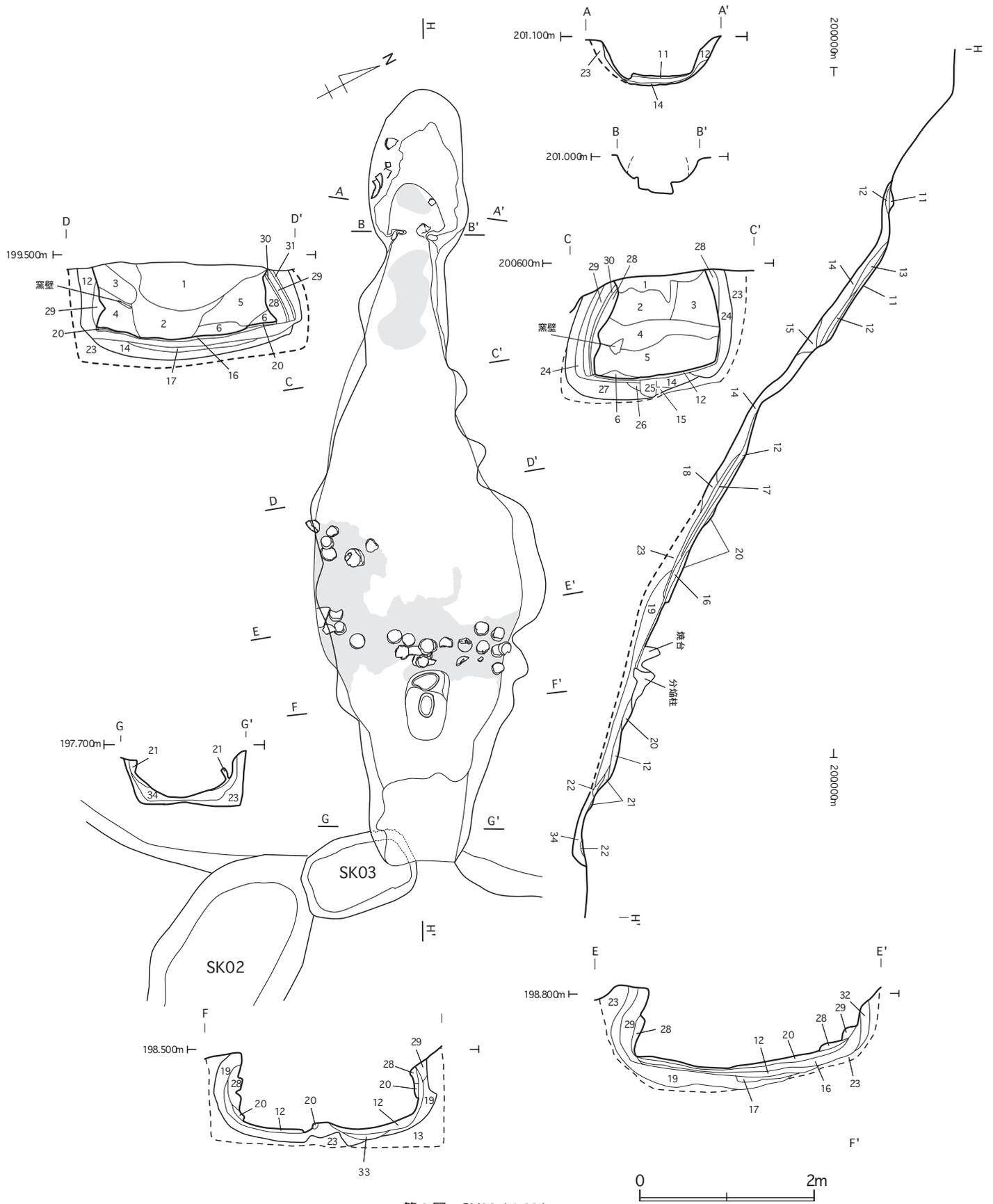
SY02 も煙道部から前庭部にかけて検出され、天井部分はずでに崩落していた。残存長約 8.8m・最大幅約 2.7m・最大傾斜 31 度を測る。出土遺物などから古瀬戸を主に生産していたものと考えられる。SY01 同様に、SY02 も煙道部からダンパーにかけての残存が良好であった。深さ 45 cm を測り、空気の開閉部分の形状をよく留めていた。焼成室では、床表面の硬化面が若干残存しており、分焰柱にほど近い焼成室では焼台の配列が観察できた。壁および床で修復の痕跡が最低 2 回観察できた。窯体内は赤色を呈している。分焰柱



第 1 図 巡間E 寮跡 遺構配置図



第2図 SY01 (1:60)



第3図 SY02 (1:60)

は残存高約 30 cm で、焼成室側から燃焼室側にかけて一度補修が行われていた。

作業施設 地山を切ってさらに窯からの掻き出し物などで整地をしている部分 (SX01)、境目の斜面に対して平行に切っている溝 (SD01)、SX01 を掘り込む形のロクロピット (SK04)、SX01 下では土坑 2 基 (SK01・02)、SY02 北東奥では、地山を削り貫いた長方形を呈する遺構 (SX03) が検出された。

SX03 は長さ約 3.2m・最大幅約 2.1m・深さ約 2m にわたり、風化花崗岩を削り貫いて作られた遺構である。内面には厚さ数センチの炭化物が堆積し、周囲には溝が巡る。遺物は生焼けの四耳壺片のみで、SY02 に伴う遺構かと考えられる。SX01 は、古瀬戸片および山茶碗片などの遺物のほかに炭化物および焼土塊を多量に含む灰層を何度も重ねて作られている。SX01 上から掘り込まれた SK04 は、長径約 90 cm・深さ約 60 cm、軸部で直径約 10 cm・深さ約 40 cm を測り、遺構上面には片口鉢が正位置で置かれていた。SK01・02 は、長軸約 3m 程、短軸約 1.5m から 2m 程で、山茶碗のみの出土であった。SY01 に伴う施設と考えられる。

窯の前庭部から SX01、さらに下方の傾斜する斜面および谷底には、灰原が展開している。谷奥部を中心に、長径約 30m・短径約 23m の範囲にわたっている。セクションでは SY01・SY02 の両窯からの灰層が互層をなしており、さらに風化花崗岩出自の粗粒砂が厚く灰層間に堆積する様子が観察できた。最深部の堆積は約 3.5m であった。

出土遺物 山茶碗系では碗・皿・片口鉢など、古瀬戸では、碗・折縁深皿・皿・鉢・天目茶碗・柄付片口・香炉・四耳壺・瓶子・水注などが出土した。古瀬戸の出土では特に折縁深皿が目立っていた。

窯操業以前に堆積したと思われる赤褐色土からは、縄文土器 (中期後半) が若干出土した。また、石鏃・磨製石斧も採集されている。

ま と め この調査では、独立した丘陵全体を調査対象とした。そのため、窯本体・作業施設および作業場・灰原を総合して調査できたことにより、窯周辺の窯業生産の復元ができるのが大きな成果である。窯体内の出土遺物では、SY01 は山茶碗 9 型式、SY02 は古瀬戸中期 IV 段階が中心である。灰原では両窯からの灰層が互層をなして堆積していることから、SY01 と SY02 はほぼ同時操業していた時期があったと考えられる。しかし SY01 の操業終了後、SY02 の掻き出し物により SY01 の前庭部を土盛りなどして整地されていることから、最終的には SY02 のみが操業していたことが伺われる。窯体についてはダンパー構造の良好な残存状態など、貴重な資料の提示ができるものと考えられる。

(織部匡久・川添和暁)



完掘状況（東より）



灰層堆積状況（東より）



SY01（東より）



SY02（東より）



SX03（北より）



SK04（北西より）